

映像記録ガイドブック

湖西市指定無形民俗文化財

新居諏訪神社 奉納煙火祭礼



新居地域の文化遺産を活かした地域活性化事業実行委員会

目次

1 新居諏訪神社奉納煙火祭礼の歴史	5
2 花火六町 上西町・高見町・上田町・仲町・中田町・源太山町	6
3 花火祭りの役人 やくびと	7
4 手筒花火と祭礼神事	8
斎火の儀・まめひり・まめひりの高張り提灯とゾメキの揚花筒	
試み・汐花・奉納煙火・練込み、練込み囃子・お出張り	
山・大山・前夜祭とその変遷・猿田彦煙火・例大祭(神輿渡御)	
六町廻り・手打ち式・大三勘定(大三割)	
5 新居町の大筒	16
6 手筒花火の作り方	18
竹切り・竹煮・陰干し・ゴザ巻き・縄巻き・口紙貼り・節抜き	
口切り・筒掃除・梨粉(黒色火薬)詰め	
7 新居町の細工花火	24
8 細工花火の作り方	26
9 新居町の手筒花火の出し方	28
10 祭典の日程と行事の記録(平成25年度)	29



焰硝蔵の描かれた新居の絵図(江戸後期・新居関所史料館蔵)

1 新居諏訪神社奉納煙火祭礼の歴史

新居町の諏訪神社奉納煙火がいつ始まったか、については今のところ確たる資料がありません。しかし、その起源にかかわるものとして、安永9年(1780)ころに書かれた『湊大明神神輿造立記評林』(新居町近藤彰氏所蔵)に次の記述があります。貞享じようきやう(1684～1688)のころ、

七月廿六日の夜は諏訪の御社の広庭におゐて花火あけを揚、神慮いさめ奉る、御代御繁栄いやましに随って民もゆたかに神祭も年々賑やかに、提灯も花火も弥増にして…

この文言が重視されるのは、新居の手筒花火は従来考えられていたより早く、新居宿・関所の吉田藩移管(元禄15年1702)以前に始まったことを述べているからです。

吉田(豊橋市)を中心とする三河地方は古くから手筒など花火が盛んに行われていました。徳川家康 湊大明神神輿造立記(近藤彰氏蔵)の三河鉄砲方が開いた火薬使用と砲術が、泰平の世に移る中で軍事から祭祀・娯楽としての花火へ変化し広がったといわれます。新居宿と今切関所は幕府直轄の後、吉田藩管理となり、吉田におけると同様、多量の火薬を使う祭りも許されてきました。新居関所が幕府の重要施設であり、それを支える町民をねぎらうということで、移管以前から祭りと花火が幕府によって認められていた事情もあったと考えられます。



江戸時代前期の新居宿の様子を描いた図(新居関所史料館蔵)

2 花火六町 はなびろくちょう (上西町・高見町・上田町・仲町・中田町・源太山町)

花火町とは、新居関所周辺の旧新居宿のうちの上記六町をいい、諏訪神社の夏の花火のお祭りをを行います。

花火六町は大三町と呼ばれる仲町、源太山町、西町（西三町／上西町・高見町・上田町）に分類されます（中田町は面積・人口も少ないため大三町に分類する場合仲町に含む）。大三町は花火六町を戸数により3つにわけ、その中で花火を出す「山」や年番の運営、大筒や細工花火・練り込みや太鼓台の順序、会議の発言権などを決め、毎年の祭典経費の収支も大三町それぞれの戸数から算出する大三勘定（大三割）と呼ばれる独特の精算方法で決められていきます。

お祭りの運営と、その責任を負う当番町のことを大年番といいます。大年番は中田町を除く五町が順に、前夜祭の会場準備、綱火などの作成を担当します。大年番の回り順は、仲町→源太山町→西町（西三町／上西町・高見町・上田町）となり、西町（西三町）では3年に1度当たる町が三町のうち一町であるため大年番は9年に1度になります。

また西町（西三町）では大年番とは別に3年に1度、三町内で回る小年番という役割も決められています。大年番の補佐的な意味を持つものですが、現在では試み・前夜祭の西町山の運営などを担っています。

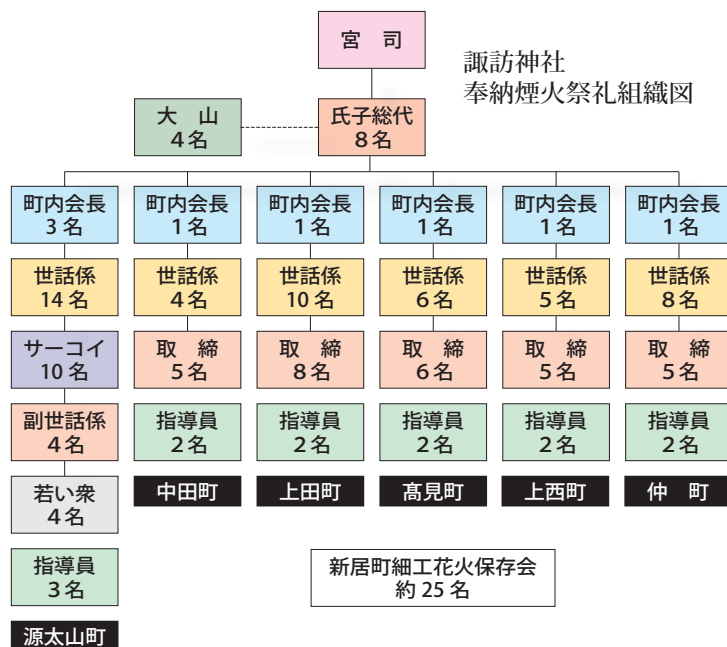


大正時代の諏訪神社・一の鳥居（新居関所史料館蔵）

3 花火祭りの役人 やくびと

花火祭りを仕切る六町の人たちを役人と呼びます。役人は、年長者から順に世話係・取締に分かれ、それぞれに役割が決められ、お祭り2ヶ月前の全体会議（六町会議）から各町の会所、公民館を拠点に活動に入ります。子供の太鼓台の練習、取締が出す役花火の準備や各町との調整や連絡、祭礼行事や会場の準備など、役人たちは一体となって祭りを進行していきます。各町の世話係・取締には、それぞれ大將が立てられ、責任者として祭典を取りまとめ、さらに諏訪神社の宮下である仲町世話係大將が、諏訪神社祭典委員会委員長として祭り全体の責任を持ちます。

源太山町のみ取締を副世話係と呼び、その上に〈サーコイ〉、下に若い衆という役を設け独自の組織を作っています。これは源太山町が他町との力関係を意識して差別化を図ったものといわれています。サーコイの呼び名は、他町との喧嘩のときの掛け声「さあこい！」に由来します。



4 手筒花火と祭礼神事

【斎火の儀】 試み・前夜祭の両日、諏訪神社社殿で宮司が古式にのっとり火打石で火を起こし、付け木に点火します。これが斎火で、お祭り神事のすべての火の元になります。斎火は役提灯と火縄に移されます。



斎火の儀

【まめひり】 斎火の儀で灯された斎火と火縄は氏子総代、世話係らとともに試みの会場、新居小学校へ向かいます。この後に各町の目印となる高張り提灯を掲げ、子供たちが打揚げ花火の木製の筒を台車に乗せ続けます。子供たちはこのとき「豆煎り候、伊勢屋のドンギリダマ」という悪口唄を声を揃え囃して通ります。その昔、祭りの寄付を断った地元商家の伊勢屋をケチだと揶揄した文句が歌い継がれたものです。



まめひり



揚げ花筒

【高張り提灯とゾメキの揚げ花筒】

まめひりで、各町が町名を書いた高張り提灯と揚げ花の筒を使うのには、試み会場が町内を転々としていた昔、各町揚げ花の順番が来ると高張り提灯を高々と揚げ、曳いていった筒を据え揚げを上げた故事の名残です。



高張り提灯

【試み】 金曜日・新居小学校 試みは、自作の花火の出来具合や火薬の調合具合を試みるということです。「心見」という字句で『新居町方記録』宝暦2年(1752)に初めて登場します。

試みでは、揚げ花 緑星を合図に、翌日の前夜祭で据付式の大筒を出す町(上西町以外の五町)が大筒を1本ずつ披露します。上西町が試みと前夜祭に大筒を出さないのは、前夜祭に猿田彦煙火を盛大に行うことに重きを置いていたためです。

次に三役と呼ばれる役花火を披露します。三役とは源太山町・仲町・西町(西三町)の代表者が出す花火です。その後、乱点けに移り、一般の人が自らが作り上げた花火を披露します。昔は各町の取締や若い衆が試験的にそれぞれ3、4本ずつ出す程度でした。

乱点けの後、六町での六本揃、新居町細工花火保存会の細工花火、源太山町サーコイによる三双筒が披露され、スターマインの打ち上げ、手打式で終了となります。



大筒



三役



乱点け



細工花火

【汐花】 前夜祭当日、高見町では、花火六町のお祓いに使う清めの汐花を表浜から汲んできます。夕方、高見町を出発した赤鬼、青鬼が、花火六町とその家々を汐花と榊の枝で祓い清めて廻ります。この行事を汐花といいます。鬼は代々、高見町が務めます。

江戸時代、鬼は各町のお祭り屋台や宝船の先祓いを務めていたようです。この行列に出ていた祭礼屋台が昭和53年に上西町の若宮神社の倉庫から発見され、その棟に諏訪神社の社紋〈榊の葉〉が記されていたことから花火祭りに使ったものではないかと考えられていました。またこの屋台には操り人形やからくり人形で使う綱の溝が切ってありました。さらに、高見町から見つかった操り人形には「文政十三年高見若キ者」と記してあり、当時は祭礼屋台で人形による三番叟を演じ町を練り歩いたことがわかりました。しかし、天保改革の儉約令により祭礼屋台や宝船が廃止され、現在の赤鬼、青鬼だけが残りました。

【奉納煙火】 前夜祭の夕方斎火の儀で受け渡された火縄により宮司、氏子総代、大山、世話係立会いのもと、六町の取締の各代表が諏訪神社社殿前で奉納煙火を行います。



汐花



奉納煙火



お祭り屋台

操り人形



【練込み・練込み囃子】 各町がお祭り会場へ太鼓台や大筒台を引っ張り、お囃子を囃し騒ぎ立てて向かうことを練込みと言います。練込み囃子には早節、煽り節、帰り節の3つがあります。

早節は、祭典会場に向かう途中で囃します。「ナンダコラセ」と囃すのが特長です。煽り節は、大筒が火を噴き上げるとき囃します。「ソラダセダセヨ」と繰り返しますが、昔は「サアダセダセヨ ソラダセダセヨ」と囃していました。お囃子で騒ぎ立てながら花火を出すことは、新居だけの風習です。帰り節は昔、町中が祭典会場だった頃、各町が細工花火や大筒を出し終えた後、会所や公民館へ帰る道々奏でられました。

【お出張り】 諏訪神社での神事を終えると、諏訪神社から神籬と呼ばれる榊の葉が宮司、氏子総代、大山、世話係によって前夜祭会場へ運ばれ、花火の見える場所に安置されます。これをお出張りと言い、そこで煙火開始前に神事が行われます。神様の御魂が社を出入れ、降神の儀により神籬に遷り花火をご覧になるとともに奉納煙火の安全を見守ります。



練込み



お出張り

【山】^{やま}山とは花火を出す^{やぐら}櫓のことです。大三町が1つずつ持ち、南から^{みなみやま}南山の源太山、^{げん だ やま}中山の西町山、^{なかやま}北山の仲町山と並びます。それぞれの山は大三町が取り仕切り、一般の人はそれぞれの所属する町の山以外では花火を出すことができません。各山には常時、火縄を持った取締一名が載り、大筒・双筒・猿田彦が行われる間に、花火に点火していきます。

【大山】^{おおやま}大山は前夜祭会場に作られる特別な高い櫓^{もくろくあんどん}のことで、それに載る人のことも言います。大山役は大三町で務め、現在は仲町1名、源太山町2名、高見町1名の4名で務めています。

大山には奉納煙火の順序を書いた目録行灯が掲げられ、前夜祭は大山の口上から始まります。各町の番組の花火を出す合図と山の花火中断の合図は、大山から運動場の南端まで張られた^{つなび}綱火によって行なわれます。本来、大山役は氏子総代が務めていましたが、祭礼中あまりに多忙なため、大山という役職を作り運営することになりました。



山



大山



奉納煙火の細工順を書いた行灯



綱火

【前夜祭とその変遷】土曜日・新居中学校 前夜祭は高見町の往還で行っていましたが、明治31年火薬規制が強化され、翌年諏訪神社の社前、現在の神社入口脇の石垣上に、昭和42年に新居中学校の校庭に移転しました。前夜祭は大山の口上から始まり、揚花^{みどりぼし}の緑星^{さる た ひこ}の合図で山開きとなり、各山から手筒花火^{おおづつ そうづつ}が出されます。大筒・双筒・猿田彦^{さいくじけん}の開始の合図はすべて綱火によって行われます。花火を出す順番細工順は昔から決まっています。各町が披露する花火が細工花火から大筒に変わっても、昔の名残りで、大筒を出す順番を細工順と呼びます。



昭和初期・山での興行の様子
諏訪神社一の鳥居前の石垣上



昭和30年代・上西町往還での
猿田彦煙火（新居町・石巻巽氏蔵）



中田町の大筒
（昭和29年・一の鳥居前の石垣）



路上での羊羹^{ようかん}花火（昭和30年代・
上西町往還・鈴木毅氏蔵）

【猿田彦煙火】 猿田彦煙火は、上西町による乱点けのことです。間髪を
入れず点火していくため一度に数十本の火柱が乱舞します。

由来は、天照大神の命を受けた邇邇芸尊が日本を治めるべく高天原から
地上に降りた(天孫降臨)とき、猿田彦神が行く手を照らし先導した
という神話を元に、宝暦10年(1760)猿田彦神の面と衣装を着けた上
西町の役人(やくびと)を先頭に大・小太鼓、ほら貝のお囃子で町中を練りながら花
火を出したのが始まりといわれます。

独特のお囃子は、出陣に際しほら貝と太鼓で士気を鼓舞した武田信玄
の故事を模したともいわれます。新居の花火の特長であるお囃子・乱点
けの大騒ぎを最もよく表しているのが猿田彦煙火です。



猿田彦煙火



猿田彦の練込み

【例大祭】日曜日・諏訪神社・神輿渡御 お祭り3日目の本祭りに、神事(宮
座)を終えた後、神輿渡御が行われます。神輿は花火六町と踊り四町を
巡ります。お先祓いの榊・汐花・赤鬼・青鬼・社額・鉾・社旗・猿田彦・
太刀袋・獅子頭・太鼓・神輿・神職・宮司の順で町内を巡ります。



御神体遷しの儀



神輿渡御

【六町廻り】 日曜日夜7時からの六町廻りは、子どもたちの太鼓台引き
廻し(ぞめき)と取締の仮装の行列を行います。浴衣姿の世話係を先頭
に子どもが叩く太鼓台、取締や若い衆の仮装行列が続きます。この仮装
は江戸時代からのもので、唐人衣装などで仮装して賑やかに行われてい
ました。六町を廻り、午後9時までそれぞれの会所・公民館に帰ります。

【手打ち式】 手打ち式は3回(試み、前夜祭、例大祭)行われます。最
終日の手打ちは、お祭り3日間の締めとなります。各町の代表世話係が
中田町三間道の四つ角に集まってきます。各町の役提灯が輪になって並
ぶなか午後9時、式が行われます。仲町世話係大将の「ヨーオ、シャンシャ
ンシャン、オシャシャンノシャン」の手打ちの音頭で祭典は終了します。

【大三勘定】(大三割) 祭典が終了した翌朝、高見町公民館に各町世話
係代表が集まり大三勘定(祭典経費の精算)が開かれます。大三町(仲町・
源太山町・西町〈西三町〉)による大三勘定は、各町の戸数により六町
を3つに分け、祭典経費の負担金を大三町の戸数により決めるものです。
大三勘定は、単独では大三町ではない高見町で行われていますが、これ
は江戸時代からお祭りの中心地が高見町であったことに由来します。



六町廻り



六町廻り



手打ち式



大三勘定

5 新居町の大筒

松の太木を半分に割り、半円の溝をそれぞれに彫り筒抜けの状態にする。火が外側に噴き出さないよう、両半分の接合面に榾^{すりばち}をすりつぶした赤味噌を塗る。これを合わせて竹のタガを締める。江戸時代から昭和 30 年代初頭までは、この松の筒に梨粉^{かりこ}を直に詰めていた。詰め方は中田町はカケヤを使い、高見町や上田町は小詰めを使った。カケヤの打ち込み回数や詰め道具、手順等、各町それぞれ秘伝があった。

大筒点火後、梨粉は威力を増していき、最後の梨粉（大大）まで燃焼し尽した瞬間に、和紙で硬く包んで底に仕掛けたハネ粉^{はねこ}に引火、大筒上部から轟音とともに噴出するものであった。大筒底部^{かんぬき}を門で塞ぎ、大筒台に縛って固定する。ハネ粉の暴発や梨粉充填作業の失敗による暴発は上と横に向かうため、事故やけがは現在の形式の大筒よりも大きかった。

昭和 30 年代に入り、豊橋市での大筒暴発事故と前後し、新居町の大筒も岐路を迎えることになる。かねてからの大筒に纏わる事故や門で固定された構造上の問題、新居町の祭典会場（大筒は諏訪神社入口の石垣上、日露戦争慰霊碑の前で披露されていた）の狭さなどの問題によって、県の指導が入り、大筒の門を外し、木枠への直詰めから予め梨粉を充填した竹をタガの巻かれた状態の木枠の上部から据えて、クサビを打ち込んで固定する構造に変更した。このときの県の指導に対しては六町からは反論も出ず、役人はすんなりその指導を受け入れた。大筒はくり貫いた松の木に梨粉を直詰めして炎を噴き出させるため毎年新しい木枠とタガが必要で、そのたび多額の経費がかかり、寄付だけでは賅えなくなっていたこと、町内のタガ職人も少なくなったことが、指導を受け入れた理由であった。

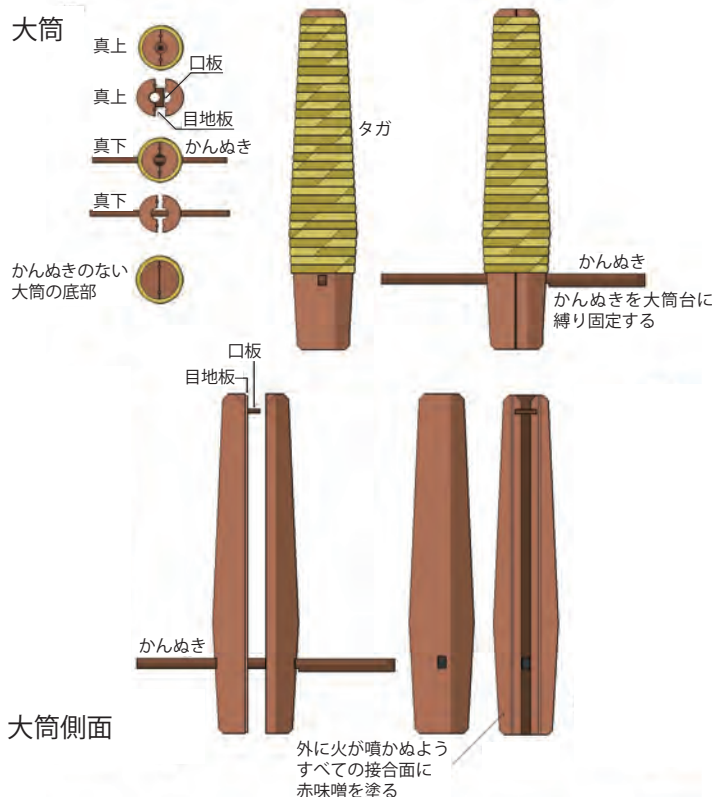
嘉永 2 年（1849 年）の祭礼番組表を見ると、花火六町それぞれが大筒と細工花火を行っていたらしい記述がある。前夜祭では、金銭的に余裕のある仲町と源太山町が大筒と細工花火の両方を、他四町は細工花火、猿田彦のみ行っていた時代もある。手間ヒマのかかる細工花火は昭和 36 年に廃止、53 年に 1 基のみ復活した。

勇壮な大筒は形を変えながらも各町を代表する花火として受け継がれている。中田町、源太山町、高見町の大筒はその構造・形状が変化した。中田町の大筒はゴザと縄巻きの双筒、源太山町、高見町もゴザと縄巻きの大筒となった。これは、木枠とタガを毎年新調する大筒よりもゴザと縄巻きの大筒の方が経費が少なくて済むことと、町内唯一のタガ職人の廃業でタガが入手困難になったことによる。

※祭典会場では、大筒の炎が噴き上がると各町の人間が煽り立て炎の中に提灯などを投げ入れるのが風習だった。



大筒



6 手筒花火の作り方

【竹切り】 手筒花火は孟宗竹を選ぶことから始まる。陽が当たりにくい北側の奥深い竹藪から、年齢が3年以上経過したもので真円に近く、肉厚で傷がなく真っ直ぐに伸びたものを選ぶ。

真円で肉厚の竹



節の部分である程度年齢を判断できる。1年目の竹は節の下部分に白いものが付着しており、爪でこすると取れる。年数を重ねるとこの部分は黒ずんでいく。なるべく色の濃い黒ずんだものを選ぶ。竹の年齢を正確に判断するのは難しいが、熟練者に習い竹の状態や風合いを見る。



1年目の竹



2年目の竹



3年目の竹

竹が真円であるか目で確認するだけでなく、両手で竹を丸く撫でながら確かめる。撫でたとき凹凸があり縦に深く筋が入っているものは内面にも筋が入っていることが多く、火薬が詰まらず空間ができ、火が均等に回らない場合があるので使わない。肉厚で節の線が平らなものを選ぶ。



軽く握り丸く撫でる



節目の入った竹



真っ直ぐに伸びた竹の節

竹を選ぶ際にもっとも注意することは虫喰いがないこと。竹虫（ベニカミキリの幼虫など）による虫喰いは外部からは非常にわかりにくく、特に竹の肉の内部だけを喰われている場合、花火が暴発する危険が高い。

竹虫



竹は根に近い部分を切る。切った箇所より、さらに上に一節分、花火の噴射口になるところで切り落とす。切りだした竹は花火の長さに切る。



根に近い部分で切る



一節上で切り落とす

【噴射口の穴開けと竹煮】 花火は根元側が噴射口になる。切り出した竹に噴射口を開ける。それ以外の残りの節を全て粗く抜き取る。その日のうちに煮て油抜きをする。竹の油分などのアクを抜き、竹の繊維を堅くするため、水を沸騰させた大釜で10分程度煮る。煮て乾燥させた竹は、油が抜け弾力がなくなり堅く締まる。



噴射口を開ける



沸騰した湯で竹を煮る

【陰干し】 煮た竹を1週間ほど日陰で干し乾かす。こうすることにより切った直後には発見できなかった若い竹の縮みや虫喰い、竹の傷みなどを見つけることができる。



陰干し

【ゴザ巻き】 陰干しした竹に、ゴザを1枚ずつきつく巻いていく。火薬の斤数^{きんすう}が多ければ安全を考えゴザを多く巻く場合もある。ローラーを使う方法もある。2本のローラーに載せたゴザと竹に膝で体重をかけ、転がし、ゴザをきつく締める。はみ出たゴザは竹の長さに合わせ切り落とす。



ゴザの手巻き



ローラー巻き



ゴザを切り落とす

【縄巻き】 まず節の部分を使って縄を止める竹くぎを作る。竹釘は、手間のかかる紐の代わりに考えられた新居独特のもので花火1本に10本程使う。噴射口側から縄を巻いていくが、途中で花火を持つ手縄^{てなわ}を上下1本ずつ入れる。竹に傷をつけぬよう竹釘を打ち込み縄とゴザを留める。



縄の手巻き



竹釘



竹釘を打ち込む

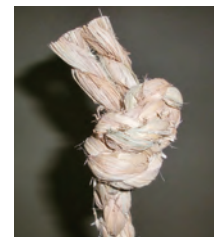
手縄の縛り方



かきね縛り



すっこぎ



まとめ縛り



縄巻きには機械を使うこともある。ターンテーブルの上に花火を上下逆さに置き、上部の留め具で花火を固定し、下から縄を巻いていく。

縄巻き機による縄巻き



縄止め用に竹釘が考案される前は、堅い紐^{ひも}を使って一本一本丁寧に仕上げていた。中田町では東三河(吉田)と同様、縄止めに紐を使っている。

縄止めの様子(中田町)



【口紙貼り】 火の勢いで噴射口が広がるのを防ぐため、和紙の口紙^{くちがみ}を噴射口に幾重にも貼り補強する。糊やボンドなどを使い1日数枚ずつ、乾かしながら数日かけて貼る。

口紙貼り

【節抜き】火薬を詰めやすく、筒の中で火が均等に廻り安全に花火が出るように、粗抜きにしたまま残った噴射口以外の節を、ヤスリで丁寧に削り取り完全に凹凸を無くし、竹筒の内側を綺麗な筒状に仕上げる。



節抜き

節抜き用のヤスリ

昔の鉄爪

【口切り】口紙が完全に乾いたらヤッパと呼ばれる小刀で、塞がった状態の花火の口を丸く切り、噴射口を作る。噴射口は安全上から竹の内径の3割で切ることが基準とされている。

口切り



【筒掃除】花火を出す前日に筒の中を丁寧に掃除して、ほこり、カビ、削りカスなど異物を取り除く。梨粉を詰めるとき、火薬がこぼれないように噴射口に和紙を1枚貼って口を塞ぎ、その上から火薬を詰める際に噴射口を突いて割らないように新聞紙を丸く詰める。



筒の掃除

掃除用の棒

補強用の新聞紙

【梨粉（黒色火薬）詰め】花火を出す当日の作業 噴射口を下にして底から梨粉を詰める。梨粉の名は由来不明で、新居、三河、長野、岐阜の一部でしか使われていない。天候や梨粉の湿り具合を見て、水や焼酎を霧吹きで吹きかけ、湿り気を持たせる。梨粉に、鉄を細かく砕いた鉄粉を混ぜる。鉄粉は花火に橙の色を着ける。鉄粉が橙色に輝き、宙に舞うことを新居では華と呼ぶ。よく混ざらず固まった鉄粉やダムになった梨粉が原因で点火後の花火が“暴れる”ことを、新居ではシャッキリと呼ぶ。



梨粉と鉄粉を混ぜる

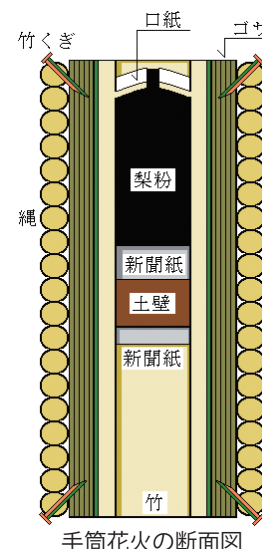
異物が混入しないよう梨粉を入れる

細い詰め棒で小詰めする。真ん中を突かないよう竹の内壁に棒の先を当て、下に滑らせながら円を描くように詰めていく。次に太い詰め棒（大棒）で押し軽く叩き、梨粉に隙間ができないよう平らに仕上げる。そのあと固く丸めた新聞紙・土壁・新聞紙の順に詰め、大棒で叩く。



小詰め

大詰め



手筒花火の断面図

7 新居町の細工花火

新居の細工花火の起源は不明であるが、源太山町『町内旧記帳』寛政9年(1797)の項に「立物」という語句で登場する。嘉永2年(1849)の同町記録では花火六町それぞれが細工花火を披露していたと考えられる記述が見え、毎年、各町が細工花火の出来栄を競っていたようだ。その優劣に起因する喧嘩も絶えなかった。



細工花火 (平成26年試み)

ボウズ玉



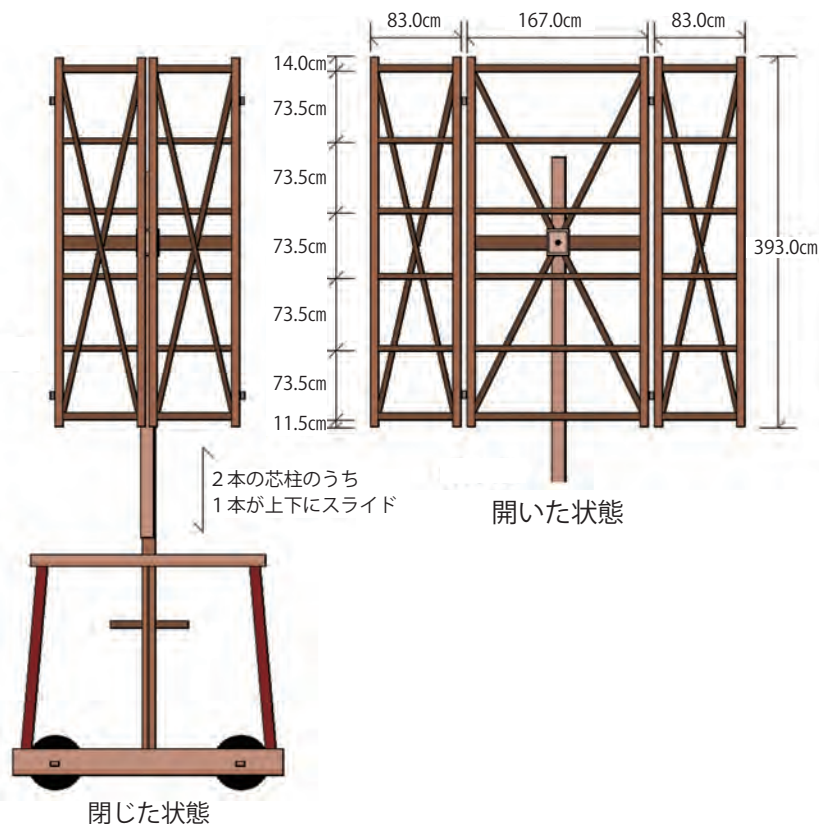
新居の細工花火の形状は、観音開きになる木枠の内側に仕込まれたボウズ玉(硫黄を和紙で包んだもの)が柔らかに青白く燃えて風刺画などを浮き上がらせるものであった。木の車輪付きの土台で細工花火自体を移動させることができ、移動時には上部の観音開きの絵枠がスライド式の支柱で伸縮・回転するという新居人の知恵と技を凝らしたものであった。この伸縮・移動方式は小路と沢が入り組んだ新居宿の町並みと深く関わる。吉田の建物花火は、地面に丸太を埋め、絵枠を取り付けるもので、新居のものより大きかった。

手間ヒマを要する細工花火(1基にボウズ玉2000個以上必要)は昭和35年に途絶え、各町は大筒で競った。同53年、細工花火の復活を期して新居町細工花火保存会が結成され、新居中学校校庭での前夜祭で昔ながらのボウズ玉と残っていた枠を使い細工花火が披露された。このときには柱、土台部分は見つからず(数年後に見つかる)、校庭に丸太を建て、その上部に滑車で枠を吊るした。55年以降試みで披露されている。題材はテレビ番組の主人公が多い。使っている枠・土台は、保存されていたものを源太山町が譲り受けたもので、旧来の姿を留めているが、櫓作りの土台支柱や車輪・車軸は鉄やゴムタイヤに変わった。

細工花火は元々前夜祭で行われていた。昭和53年復活の際も中学校の前夜祭で披露され、同55年から時間の都合で小学校の試みで披露されるようになった。火薬もボウズ玉からカラーランスに変わり、色目は鮮やかになった。点火する導火も昔は自作のもので、火がじりじりと燃え進み会場に独特の間をもたせた。現在は速火線を使用する。

手筒の口紙同様、細工花火のボウズ玉にも多量の和紙が使われた。和紙が貴重品であった時代、会所には和紙に書かれた文書や書付けがあった。それを口紙やボウズ玉に使ったことが祭り資料の散逸に繋がった。

細工花火の枠と土台



8 細工花火の作り方

細工花火は 250 年以上受け継がれている伝統的な花火である。据付式の大筒が現れるまでは、それぞれの町が前夜祭で細工花火を披露していた時代もあった。復活した細工花火では、硫黄だけを丸く固めたボウズ玉に替って色が鮮やかなランスが登場した。

細工花火の製作は下絵を決めることから始める。元絵を拡大して地面にチョークで下絵を描き、この下絵の上に木枠を載せる。木枠は三つ折りになっていて、観音開きになる。下絵を元に竹と木でキャラクターの顔を作っていく。チョークでランスの色を指定する。



下絵を描く



木枠に竹と木で絵を描く

細工花火台を組立てる。花火台は、土台ごと移動し、枠もコンパクトで折りたたみ・伸縮・回転できる。新居の町は、狭い小路と沢が縦横に走っており、それをたどって祭典会場まで行くにはこの方式が必要だった。



細工花火台の組み立て

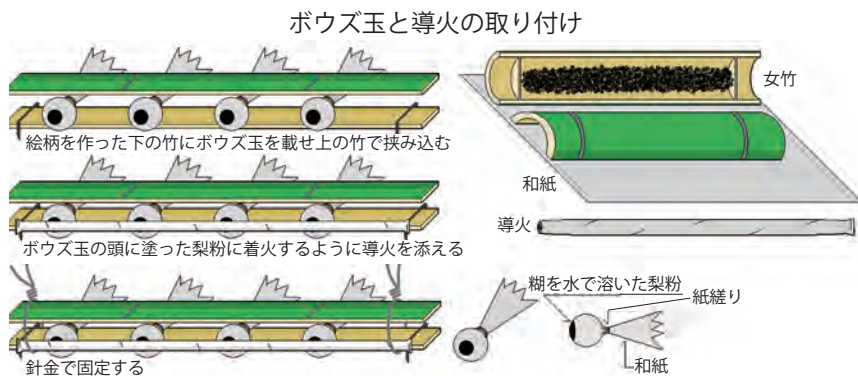
枠が完成すると、ランスを取り付ける。火薬を扱うため花火工場で作業を行う。ランスを必要本数揃える。色分けしたランスを図面に合わせ 1 本ずつ丁寧に取り付けていく。ランスに速火線を取り付ける。どの順で火が廻るか確認しながらの作業となる。



枠にランスを取り付ける



火車の製作



細工花火に花を添える火車を車輪を加工して作る。車輪には綱火と同じ花火が取り付けられる。火が入ると車輪はその勢いで回転する。

昭和 35 年以前の細工花火は、木枠に薄くそいだ竹ヒゴを元絵にあてはめ、股釘で固定して絵を作った。その絵にもう一本竹ヒゴを同じように添えて、この間にボウズ玉を挟み、縛り付け、その上に導火を付けた。ボウズ玉とは、硫黄の粉を和紙で丸く包み固く縛って、着火しやすいよう頭の部分に糊で溶いた梨粉を塗ったもの。速火線より火の進みの遅い導火で火を点け、絵や文字を浮き上がらせる。

細工花火 1 基作るのに約 2000 個余りの「ぼうず玉」を作らなければならない。ボウズ玉を作るために貴重な和紙も大量に必要だった。あまりに手間と時間が掛ること、時代の移り変わりにより、現在ではボウズ玉は使われていない。

9 新居町の手筒花火の出し方

花火の出し方にも新居独特の作法がある。〈試み〉では1人ずつ〈ふっきり〉という動作を行う。点火の後、火が落ち着き火柱が最大に立つまでの間、「さーっさっさっさーっ」と花火の筒先を静かに左に振りながら待ち、その後花火を抱えて歩き出す。

前夜祭の猿田彦では、乱点^{らんづ}けのためふっきりは行わず、花火を前方45度上に向け、間をおかずに次々と点火していく。前夜祭の〈山^{やま}〉では花火の底から暴発した火の粉で足を焼かないように、筒の底を山の前方外側に向け火柱が後方へいくような出し方をする。ふっきり、猿田彦、山の花火、これらはすべて江戸時代から続く新居独特の所作である。

試みでのふっきり



①右前方パネルに向け点火



②火が落ち着くまでしばらく待つ。



③静かに筒先を左に振る。



④火柱が最大になったら、足をあぶらないように左から右へ花火を移動させる。



⑤右脇に花火を抱え歩き出す。

10 祭典の日程と行事の記録（平成25年度）

日	行事	会場
5月14日	第1回六町会議（計4回）	仲町公民館
6月2日	竹切り・竹煮・竹くぎ作り	仲町・各町
6月4日	第1回保安教育（計2回 火・日曜日）	新居地域センター
6月30日	細工花火絵柄製作	新居町細工花火保存会作業所
7月7日	大筒製作・手筒製作	源太山町・上西町・各町
7月14日	細工花火ランス付け 紐止め手筒花火製作	三遠煙火(株) 中田町公民館
7月15日	火縄製作	源太山町公民館
7月23日	六町役人安全祈願祭 高見町への火縄上納	諏訪神社 高見町公民館

7月26日 【試み】

大筒・手筒 梨粉詰め	三遠煙火(株)
試みの神事・斎火の儀	諏訪神社
斎火行列・まめひり	新居町内
試み	新居小学校校庭

①大筒	仲町・源太山町・上田町・高見町・中田町
②三役	源太山町・上田町・仲町
③六本揃	六町
④細工花火	新居町細工花火保存会
⑤三双筒	源太山町サーコイ
⑥手打ち式	



竹釘づくり



梨粉入れ

7月27日 【前夜祭】

大筒・手筒・綱火・柳・合い火	梨粉詰め	三遠煙火(俵)
汐花が花火六町を祓い清める		花火六町内
練込み		花火六町内
例大祭前夜祭 斎火の儀 奉納煙火		諏訪神社
お出張り	諏訪神社・新居中学校校庭	
前夜祭	新居中学校校庭	

①大山口上 火縄受渡し

②綱火点火 山開き

③細工花火順

1 上田町(大筒) 2 仲町(大筒) 3 源太山町(大筒)

4 上西町(猿田彦煙火) 5 中田町(双筒) 6 高見町(大筒)

④手打ち式

7月28日 【諏訪神社 例大祭】

神輿渡御	諏訪神社
六町廻り	花火六町・踊り四町内
手打ち式	花火六町内
	中田町三間道の四つ角

7月29日 大三勘定(大三割)

高見町公民館



この映像記録は、平成 25 年度文化庁の文化遺産を活かした地域活性化事業の採択を受け、新居地域の文化遺産を活かした地域活性化事業実行委員会が制作した。

監 修 遠州新居手筒花火保存会
制作協力 湖西市新居支所
湖西市教育委員会
遠州新居手筒花火保存会
猿田彦煙火保存会
新居町細工花火保存会
新居関所史料館
新居諏訪神社
三遠煙火株式会社
諏訪神社奉納煙火祭典委員会
花火六町氏子の皆様

問合せ先 静岡県湖西市新居支所
〒 431-0303 静岡県湖西市新居町浜名 519-1
電話 053 (594) 1111

制作委託 株式会社クラフト
発 行 日 2015 年 3 月 31 日
発 行 新居地域の文化遺産を活かした地域活性化事業実行委員会

映像及び記載の写真等の無断複製及び転載は、法律で禁止されています。



